第197話 俳諧⑩ 松田未覚のこと その7 中山町歴史散策

酒田の不玉の著に「継尾集」というものがあります。序文は羽黒の呂丸が書いており、当時の庄内の俳風を知る書です。それによると元禄5年（1692年）、獅子庵各務支考が酒田、羽黒、象潟にも訪れていたことがわかり、それに未覚も二句入集しています。

宝永7年（1710年）、巣雲窟呂笳（旧羽黒町芳賀の住人）選の「三山雅集」に一句が入集しており、未覚の晩年も句作の勢いは衰えを見せませんでした。

また、一子豊武も句作を試みる年ごろに成長して、宝永6年（1709年）、父未覚や大谷の風和らの選になる「梅の露三六句歌仙」に入集し、また、正徳3年（1713年）未覚、風和の編んだ「把管」に父と子で20句が載せられているほどに進歩しました。

未覚は、左沢に移った後、松山藩主酒井忠預に従って松山に転居、享保元年（1716年）7月8日、典医として79歳の生涯をここで終えています。

御宝前涙になりぬ坂の汗

惜しむらくは、長崎に住み、新貝忠清の未亡人と結婚したころの資料が乏しいことです。折々の俳諧がどのような人々と催されたがわかりませんが、数人の弟子はあったようです。

元禄2年（1689年）6月9日、三山詣を終えた松尾芭蕉を囲む、鶴岡の永山重行家の送別句会には、不玉、曽良、呂丸、重行に未覚が加わっている（「鶴岡市史」より）ことを見ると、左沢から庄内に移っても、医業の傍らで旺盛な句作を続けていたのであろうと想像できます。

【用語の説明】

不玉：庄内藩のお抱え医師、伊東玄順の俳号。

呂丸：近藤佐吉の俳号。庄内藩の藩士の出といわれ、後に旧羽黒町に居を構えた。

各務支考：江戸時代前期の俳諧師。

※引用：中山町史　中巻　第10章　第3節　文芸と美術工芸から

私たち地域おこし協力隊です！ No.63

みなさんこんにちは！地域おこし協力隊の髙橋です！

気づけば今年もあとわずかになりましたね。山形県の冬を一度しか経験していないので、冬本番に向けて気合を入れなくてはと思っています。

ところでみなさん、冬場にスマホの電池がいつもより早くなくなってしまうと感じたことはありませんか。実はスマホには動作保証をしている温度があり、メーカーによって違いがありますが、概ね0℃～35℃での使用が推奨されています。

スマホが極端に冷えてしまうと、いつもどおりに使えなくなる可能性もあるので、冬場はかばんやポケットに入れて持ち運ぶといいでしょう。また、結露でスマホが水濡れしてしまうなんてこともあり得ますので、できるだけ気温差が生じないように少し意識してみてください。ただし、極端にスマホが冷たくなったからといって、カイロやドライヤーなどで急激に温めることはせず、自然に温度が戻ることを待つようにしましょう。

スマホ利用の悩みごとがある方は、スマホよろず相談所をご利用ください。

10：00～12：00　中央公民館　※日時はまちのカレンダー参照

髙橋　圭哉
出身地：宮城県岩沼市
趣　味：けん玉、アニメ鑑賞

●協力隊への問い合わせ先●
髙橋 ☎662-2223
（総務広報課）